

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32510

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00716

研究課題名（和文）実践当事者による協働的評価をめざす学習者参加型実践研究

研究課題名（英文）Learner-Participatory Practice Research Aimed at Collaborative Evaluation by All Parties Involved in Classrooms

研究代表者

広瀬 和佳子（HIROSE, Wakako）

神田外語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：60711752

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教師が自身の教育実践の改善をめざして行う実践研究に、学習者が能動的に関与する方法を検討し、学習者参加型実践研究のモデルとなりうる事例を示した。学習者と教師、教師間の対話による評価を実践し、データを収集した。データの分析から、「協働的評価」を「教育実践を改善するために、実践関係者が、実践の目的・方法・過程および結果について話し合い、改善のための方針・方策について合意をめざすこと」と定義した。このような評価の教育的意義を議論するとともに、協働的評価が教師に深い省察を促す実践研究に発展する可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教師が行う実践研究は自己評価的な要素が強く、担当教師以外の評価を授業改善に反映させようとする観点が弱い。本研究の意義は、実践関係者の多様な評価が実践改善につながる事例を示した点にある。協働的評価における教師と評価者の関係は、評価者が評価し、教師が一方的に評価されるというものではない。評価する者もされる者も自分自身を評価する視点を持つことが促される。このような学習者と教師の協働的評価は学習評価活動として、教師間の協働的評価は新たな実践研究アプローチとしての発展性を有している。

研究成果の概要（英文）：In order to enhance their educational practices, teachers might actively involve students in practical research. This study explored this possibility and presented a model that could be developed into learner-participatory practice research. Evaluation through dialogue between one teacher and learners as well as among teachers was carried out, and data was collected. Based on the data analysis, we defined “collaborative evaluation” as the parties involved in deliberating over the purpose, structure, process, and outcomes of the class and aiming for consensus on class improvement policies and plans. The significance of such evaluation in education was highlighted, and the possibility for collaborative evaluation to develop into practical research that encourages teachers to reflect deeply on their practices was presented.

研究分野：日本語教育学

キーワード：協働的評価 実践研究 対話 教師の省察 日本語教育

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、教師が自身の教育実践の改善をめざして行う実践研究に学習者が当事者として能動的に関与し、教師と学習者が実践を協働的に評価するための方法論を構築することである。日本語教育研究では実践研究が広く行われているが、それを一つの研究アプローチとして理論的に位置づけようとする議論が始まったのは2000年代に入ってからである。背景として、90年代から社会構成主義的な学習観への転換が叫ばれ、それに伴う研究観の変化として質的研究への関心が高まったことがあげられる。また、同時期に日本語教育学とは何かという議論が活性化したことも影響している。日本語教育の研究領域は従来、言語学、教育学、社会学、心理学等の学問分野と重なっていることから、日本語教育研究の独自性を打ち出そうとする動きが強まっていた。このような流れの中、教育実践者が研究を行う意義を問い直し、フィールド独自の実践の理論を構想する「フィールドの学としての日本語教育実践研究」(石黒2004)が提唱された。以降、実践研究の議論が活発に行われたが、その定義や研究としての価値について現在において共通認識が得られているわけではない。本研究における実践研究の特徴をまとめると、次のようになる。

- ・ 教育実践者が実践の改善を目的として行う研究で、自身の実践を分析の対象としている。
- ・ 「授業のデザイン 実施 評価 改善」というサイクルを繰り返す。
- ・ 教師として授業をデザインする自らの教育観を記述することを重視する。
- ・ 実践の全体像を捉えるために、さまざまな教室データを収集して授業のプロセスを多面的に分析する。
- ・ 言語学や心理学など基礎科学の領域で生み出された理論を実践に応用するのではなく、教育実践による理論構築をめざす(教育実践と研究を一体化したものと見る)。
- ・ 実践研究の成果を広く公開し、実践者間に従来の伝統的な言語教育に対する批判的な省察を促し、実践者コミュニティとしての成長をめざす。

本研究は、上記の実践研究の特徴に「実践当事者である学習者の能動的かつ協働的関与」を加えることで、実践研究の方法論的発展をめざした。従来の実践研究では、実践者である教師が研究する意義は認められてきたが、一方の実践当事者である学習者には研究対象の位置づけしか与えられてこなかった。実践改善のためには、教師・学習者双方が実践に対する評価を共有し、よりよい実践のために協働する必要がある。さらに、実践の評価を個々の教室に閉じられたものとせず、多様な価値観に基づく評価を経て、広くその価値を共有していくためには、教師・学習者に加え、第三者の視点も重要だと考えた。

### 2. 研究の目的

そこで、本研究では、異なる教育現場を持つ研究代表者と研究分担者が互いの授業に協働参与者として関わり、教師、学習者、協働参与者の三者の視点から実践を記述し、実践当事者が協働的に評価を行うための評価観点を抽出した。それにより、教師と学習者が評価観点を共有し、課題解決に向けて協働する学習者参加型実践研究の方法論を構築することを目的とした。

### 3. 研究の方法

研究開始当初、本研究は以下の手順で行うことを計画していた。

#### (1) 教師と協働参与者間の問題意識の共有

異なる現場をもつ者が協働実践を行うためには、まず、それぞれの教育機関の特徴、カリキュラム、学習者、学習環境等を互いに理解する必要がある。大学訪問、授業見学によって現状を把握したうえで問題意識を共有し、協働実践の枠組(授業デザイン、調査・分析方法)を確定する。

#### (2) 授業データの収集・分析

教師3名がそれぞれ他の2名の参与のもとに「授業デザイン 実施 評価 改善」の実践研究サイクルを繰り返す。実践の参与観察を互に行い、教室データを協働で収集、分析する。授業の映像・音声記録、教師の内省記録(授業記録)、学習者の内省記録(学習日誌)、協働参与者の観察記録および学習者の産出物(作文、ワークシート、テスト結果等)を収集する。教師、学習者、協働参与者それぞれの観点から実践がどのように捉えられていたのかを質的に分析する。

#### (3) 教師、学習者、協働参与者による実践評価

授業データを対象に実践の評価を行う。まず、教師、学習者に対して協働参与者がインタビューし、実践当事者が共有すべき評価観点を抽出する。次に、教師、学習者、協働参与者の三者が評価観点に基づいて実践について話し合う。三者のあいだで何が議論され、それが次の実践にどう影響を与えるのかを分析する。以上の分析を通して、教師と学習者が評価観点を共有し、課題解決に向けて協働する学習者参加型実践研究モデルを策定する。

しかし、COVID-19 の影響により授業実践および研究活動に大きな制約を受け、上記(2)(3)の修正を余儀なくされた。授業はオンラインで継続されたが、オンライン参加のみで外部者が授業評価やインタビューを実施するのは方法として適切とは言えず、環境的にも難しい状況にあった。そのため、評価の対象は研究代表者の授業に限定し、教師(研究代表者)と学習者、教師(研究代表者)と協働参与者(研究分担者)で評価を実施した。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は、以下の3点にまとめられる。

##### (1) 実践研究論文が実践のプロセスと結果を総合的に評価していない現状を指摘したこと

教師間の問題意識を共有するために、本研究では互いの授業について説明するだけでなく、それぞれが執筆した実践研究のレビュー論文(市嶋 2009、寅丸 2015、広瀬 2019)を三者が相互にメタ的に分析し、実践を記述するために必要な要素を議論した。具体的には、まず、各自がレビューの観点から重要であると位置づけた論文について、なぜそれが重要なのか、あるいは優れた実践だと考えるのかを記述する。次に、その論文について他の二者が自分自身の観点から改めて評価する。最後に、三者の重なりと異なりを分析し、読み手である第三者が実践を評価するために必要となる要素を抽出した。

分析の結果、論文の読み手である第三者が実践を評価し、目指すべき実践の方向性を議論するためには、実践者自身の教育理念、それを具現化した授業デザイン、授業プロセス、実践者による実践の意義づけが不可欠であることが分かった。しかし、これらの要素がすべて含まれている実践研究論文は極めて少ない。多くの論文が、実践の目的、授業デザイン、授業プロセス、実践の結果については記述している。しかし、実践のあるべき姿(教育理念)やそれを支える理論的基盤、その理念・理論に照らした実践の評価は記述されていない。つまり、実践の成否がテスト結果だけで判定されるなど、価値中立的な実践の記述に留まり、実践者の意図や葛藤など、当事者としての声が消され、本来多様であるはずの実践の意義が十分に記述されていない現状が明らかになった。

##### (2) 学習者と教師の協働的評価が教育実践の改善につながる事例を示したこと

(1)で明らかになった実践研究の現状を踏まえ、多様な観点から実践評価を行う方法を模索しつつ、研究代表者の授業データおよび授業評価データを4年間収集した。これらのデータを基に、教師と学習者の対話および教師と協働参与者の対話による実践評価が授業改善に与える影響を分析した。

学習者は、教師が設定した授業の枠組みにおいても、自身の学習目標に基づいて行動し、自身の評価基準で学習を評価しており、授業改善を提案する際には、自身の希望が他者の希望と異なる可能性に配慮したうえで、現実的な具体策を述べた。それは、学習者それぞれの学習観・評価観に基づいており、教室参加者が互いにその重なりやずれを認識し、合意を形成することで、授業の枠組みを柔軟につくりかえていくことが可能となる。一方、教師間の対話は、実践内部者の評価を外部者の視点から問い直し、教師に内省を促すことで実践が進むべき方向を理念的に支えるものとして機能していた(広瀬 2022)。

上記の分析を踏まえ、本研究がめざした「協働的評価」を次のように定義した。協働的評価とは、「教育実践を改善するために、実践関係者が、実践の目的・方法・過程および結果について話し合い、改善のための方針・方策について合意をめざすこと」である。その特徴は、評価者自身も評価される側に身を置き、実践改善のための方向性をともに考える対話的なやりとりにある。また、学習者と教師による協働的評価は、学習評価活動として教室で実践するのが望ましいが、本研究では具体的な活動内容を提示するまでには至らなかった。学習者が授業の目的を理解し、授業改善のための評価を行うには、授業の全体像がある程度把握できる段階まで授業が進行している必要がある。しかし、授業期間終了間際の評価では、当該授業の改善につなげることができない。また、教室参加者全員で行うべき評価と、学習者と教師が一对一で行うことが望ましい評価がある。いつ、何を評価対象とし、だれと対話するのかを他の実践者が参照できるモデルとして具体化していくことが課題である。

##### (3) 教師間の協働的評価を新たな実践研究アプローチとして発展させる可能性を示したこと

協働的評価を行う実践関係者には、実践の改善をともにめざす他の教師も含まれている。このような教師間の協働的評価は、評価する者と評価される者が対等の関係で対話し、実践の記述と分析をともに行うことで自身および対話相手の実践に対する理解と省察を深める点に特色がある。研究の過程で、教師間の協働的評価は、互いの実践改善につながるだけでなく、新たな研究アプローチとして発展させることができるのではないかと考えに至った。

広瀬・市嶋(2022)では、研究代表者である広瀬と研究分担者である市嶋が協働的評価を新たなアプローチで試みた結果を分析した。当初の研究計画では、互いの実践を参与観察し、評価を実施する予定であったが、コロナ禍の最中、対面での教室参加が不可能となった。そのため、過去の実践を対象に互いに評価を行うことを試みた。手順としては、まず自身の中で評価が定まらず記憶に残っている実践を振り返り、学習者の産出物や授業記録など使用できるデータを集めたうえで、実践のエピソードを記述した。次に、エピソードを基に、エピソードに対する解釈や

実践の意義について対話し、対話を踏まえたうえでエピソードを再分析した。分析の結果、エピソードを基に行われる対話は、教師間に実践の意義や課題の共有を促し、エピソードに対する複数の解釈を提示する。それにより、言語化されていなかった自身の教育観が再認識され、実践に対する深い省察につながることを示唆された。また、データを基盤としながらも記憶にしか残っていない実践のありようをエピソードとして記述し、対話を通して分析するという研究アプローチの発展的可能性も示された。それは、エピソードとしての実践の記述が、実証主義的な研究アプローチでは迫れない実践のリアルさや重層性を再現し、事例の偶発性や即興的な教師の応答を描くことを可能にしたからである。この試みは本研究の発展性を示すものであり、次の科研費研究課題につながった。

以上、本研究は実践研究の評価を捉え直す「協働的评价」という新たな観点を提示し、学習者参加型実践研究のモデルとなりうる事例を示した。このような評価の教育的意義を議論するとともに、協働的评价が教師に深い省察を促す実践研究に発展する可能性を示した。

#### <引用文献>

- 石黒広昭(2004)「フィールドの学としての日本語教育実践研究」『日本語教育』120, 1-12.
- 市嶋典子(2009)「日本語教育における『実践研究』論文の質的变化 学会誌『日本語教育』をてがかりに」『日本語教育論集』25, 3-17
- 寅丸真澄(2015)「日本語教育実践における教室観の歴史的変遷と課題 実践の学び・相互行為・教師の役割に着目して」『早稲田日本語教育学』17, 41-63
- 広瀬和佳子(2019)「教師は実践研究においてピア・レスポンスをどのように評価しているか 文献レビューを通して」『日本語教育』174, 1-15
- 広瀬和佳子(2022)「教師学習者間および教師間の対話による実践評価 協働で学びの場をつくるために」『日本語教育』183, 34-49
- 広瀬和佳子・市嶋典子(2022)「学習者のレポートに表れる文化的葛藤, 意見の「揺れ」をどう見るか 教師間の対話による協働的评价」『第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』626-631

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 広瀬和佳子	4. 巻 183
2. 論文標題 教師学習者間および教師間の対話による実践評価 協働で学びの場をつくるために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 34-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 広瀬和佳子・市嶋典子	4. 巻 25
2. 論文標題 学習者のレポートに表れる文化的葛藤，意見の「揺れ」をどう見るか 教師間の対話による協働的評価	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ヨーロッパ日本語教育25（2021日本語教育シンポジウム 第24回AJEヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集）	6. 最初と最後の頁 626-631
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 寅丸真澄	4. 巻 6
2. 論文標題 「複言語・複文化社会を考える」授業実践の試み 多様な学生たちの体験と気づきのつむぎ合いを通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 APJE（スペイン日本語教師会）第6回シンポジウム論集	6. 最初と最後の頁 79-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 市嶋典子	4. 巻 18
2. 論文標題 初級の日本語学習者と教師はどのように対話のプロセスを創出するのか イタリアの活動型日本語教育の事例をてがかりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化教育研究	6. 最初と最後の頁 40-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14960/gbkkkg.18.40	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 広瀬和佳子	4. 巻 174
2. 論文標題 教師は実践研究においてピア・レスポンスをどのように評価しているか 文献レビューを通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20721/nihongokyoiku.174.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件(うち招待講演 1件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 広瀬和佳子
2. 発表標題 協働的な学びの場をつくる教師の役割 書き手に省察的対話を促すために
3. 学会等名 第18回協働実践研究会「協働が拓く多様な実践 日本と海外の実践の今」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 市嶋典子
2. 発表標題 活動型日本語教育における評価
3. 学会等名 ヨーロッパ日本語教師会(AJE)セミナー(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 広瀬和佳子・市嶋典子
2. 発表標題 学習者のレポートに表れる文化的葛藤, 意見の「揺れ」をどう見るか 教師間の対話による協働的評価ー
3. 学会等名 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(16th International Conference of the European Association for Japanese Studies共催) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 寅丸真澄
2. 発表標題 「複言語・複文化社会を考える」授業実践の試み 多様な学生たちの体験と気づきのつむぎ合いを通して
3. 学会等名 APJE (スペイン日本語教師会) 第6回シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 広瀬和佳子
2. 発表標題 学習者と教師による対話的授業評価 学習者参加型実践研究をめざして
3. 学会等名 日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 広瀬和佳子・市嶋典子・寅丸真澄
2. 発表標題 理念と実践の関係を考えるための協働的評価
3. 学会等名 言語文化教育研究会第6回年次大会パネルセッション
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寅丸真澄
2. 発表標題 学習者のクリエイティビティを活かしたシナリオ作成の日本語教育実践 創造に潜むステレオタイプの意識化と批判的省察の可能性
3. 学会等名 言語文化教育研究会第7回年次大会ポスター発表
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 市嶋典子
2. 発表標題 Learner perceptions and the learning process of dialogue assessment: An analysis of data from the Action Research Zero Workshop. In H. Hosokawa, N. Ichishima & M. Mariotti, Is a 'zero' always a 'zero'? : From 'blank-learners' to 'maieutic teachers.'
3. 学会等名 Panel conducted at the 23rd Japanese Language Education Symposium in Europe (AJE). (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 広瀬和佳子・寅丸真澄・市嶋典子
2. 発表標題 現場を異にする教師をつなぐ実践の記述とは 論文レビューによる実践の協働的評価
3. 学会等名 インドネシア人の労働と定着促進のための連携・教育研究会「アジアと日本における外国人材の雇用と定着を考える」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 広瀬和佳子
2. 発表標題 日本語教育における質的研究
3. 学会等名 日本質的心理学会第15回大会, 研究交流委員会企画シンポジウム16「質的研究の多次元領域マップを創る」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 池田玲子・館岡洋子・近藤彩・金孝卿(協働実践研究会)(編) 広瀬和佳子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ココ出版	5. 総ページ数 368
3. 書名 第1部第2章「協働的な学びの場をつくる教師の役割 書き手に省察的対話を促すために」pp.19-38. 『協働が拓く多様な実践』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	市嶋 典子  (ICHISHIMA Noriko)  (90530585)	金沢大学・歴史言語文化学系・教授    (13301)	
研究分担者	寅丸 真澄  (TORAMARU Masumi)  (60759314)	早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授    (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関